

年と考えられる。赤膚焼では従来は釉を使っていなかったが、大仏殿再興のとき長門から用材を入手した関係で寄贈された萩茶碗があり、木白はそれを研究して春日祭礼に使ったといわれる。「釉薬調合法」に、春日祭礼に使ったという白土を釉薬に用いセキと名づけている。木白は、大坂の西横堀の天満屋喜兵衛と淡路町の布屋利兵衛の二軒に作品を送っている。さらに「楽焼はわれの力もおよぶまじ、地水火風の恵みなりけり、木白造」という言葉も残している。

奥田木白は、こうして赤膚焼の名をあげ名工として幾多の作品を残し、明治四年（一八七二）二月十三日、七十二歳で没した。その子木佐^{もくさ}も器用で父にまさる技術をもっていたともいわれ、二代目木白を名乗って、父と同一の印を使ったので、その区別がつけにくい。

また木白のロクロをひいた人として、五条山の山口甚次郎の長子山口縫造の名が伝えられている。この人は、京系統の名工でロクロの名人であったといわれ、明治三十五（一九〇二）に八四歳で没した。

第三節 名所としての奈良

奈良の名所

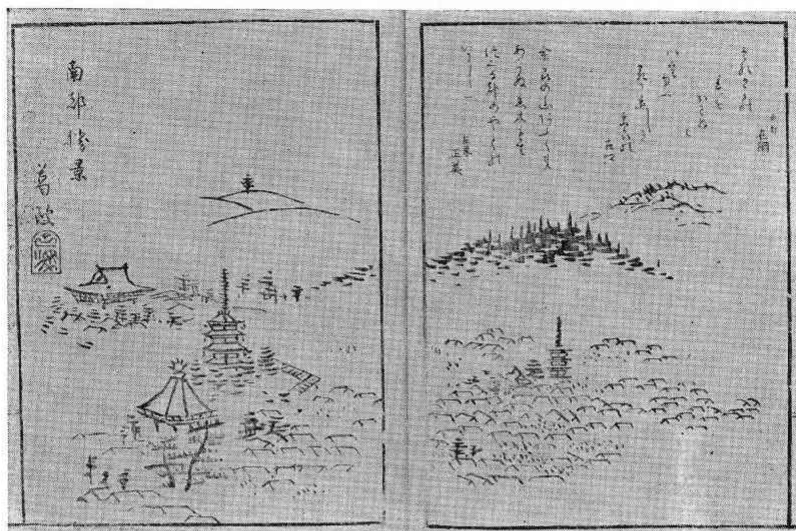
寺社参詣の旅から遊覧の旅へ

奈良は、古代では政治の都であったが、平安遷都以後は南都といわれて寺社の都であったために、貴族や僧侶らはなやかな巡礼地の中心をなしていた。したがって、藤原氏の氏神・氏寺で

ある春日社や興福寺をはじめとし、東大寺など南都の諸寺がその目的地であったが、広い意味で南都とも考えられた西の京や斑鳩地方の寺社もまたこれに含まれ、さらに初瀬や多武峯、飛鳥から吉野・金峰山への巡礼にも、奈良の諸寺社もうでがともなっていた。

そしてこれらの旅の有様は、貴族たちの日記にも記され、文学作品からもうかがわれるが、巡礼記や見聞記などほもっとも端的にこれを示すものであり、寺社縁起の類もまた巡礼への案内記を兼ねていた。それらのうち早いものはすでに平安時代末期から残されている。すなわち大江親通が嘉承元年（二〇）に記した『七大寺日記』と、かれの再度の巡礼記である保延六年（二四）の『七大寺巡礼私記』がまず知られている。ついで建久三年（二五）の女院の巡礼につき従った実叡が著した『南都御巡礼記』が残されており、建保四年（三六）の『諸寺建立次第』や弘安二年（三九）の『諸寺略記』がこれに続く。室町時代に入ると、『南都七大寺巡礼記』や『諸寺縁起集』もできた。しかし寺社参詣だけが奈良への旅の目的であったとはいえない。すでに清少納言も『枕草子』のなかで、「野は」として飛火野や春日野を、「池は」として猿沢池を、「山は」として三笠山をあげているので、そこには伝説に富む自然が、寺社と融合した姿で巡礼者の心をとらえていたことが想像できる。

つぎに寺社もうでをする人の側からみると、中世には貴族や僧侶のほかに武士や富裕な農民の姿も見られるようになるが、この段階では人民全体からみてごくその一部に過ぎなかった。ところが中世も末期になると、動乱のなかとはいえ民衆の成長にもなって旅する者もようやく増加していった。さらにこのころから、「お伊勢参り」や「観音もうで」が広まりつつあったために、奈良はその道筋に当たるところから、奈良への旅人も増加してきたようである。伊勢参りは、京都など各地から来る人たちが奈良を格好の中間遊覧地としたし、西国三十三か所観音巡礼については、興福寺南円堂は九番の札所としてあり、六番の壺坂寺、七番の岡寺、八番の長谷寺とともに多くの



南 都 勝 景『大日本名産図会』

巡礼者を集めるようになった。なお奈良を通るものとしては吉野方面への旅があった。吉野は「みたけ詣で」の入口として信仰の地となっていたが、平安時代の末期以後にはさらに花の吉野として西行がこれを有名にし、南北朝以後は歌書と軍書も、人々の心を動かすところとなってきた。

しかし、中世の末期から奈良を訪れる旅行者が増加し、奈良がようやく名所化してきたといっても、近世とはやはり比較にはならなかったであろう。江戸時代になると、まず元和偃武（げんばえぶ）以来の平和の到来があった。そしてまた、幕藩制の確立によって貴族や僧侶にかわって支配層の位置を独占した武士と、この政治権力に癒着した人々の階層ができたこと、城下町や交通・産業の要衝にできた都市の発達による町人の富裕化、村落における農民の安定化なども、旅行者の増加した理由として無視できない。また、江戸時代中期からの農業技術の進歩普及や新田開発による生産の上昇と、貨幣経済の農村への浸透、余剰生産物資の流通と交通の発達、これらがまた民衆の消費生活を向上させ、各地への旅を可能にさせる条件でもあった。もちろんこの体制

下では、身分を度外視したような無制限な消費生活は許されるわけではなく、分限を超えた浪費は欠所追放に処せられる危険をまねくものであったから、民衆の旅も自然許される範囲でのことであった。しかし、それでも旅の間にわずかに身分差を忘れ、富を自由に使いうる世界を求めたのも事実であったであらう。「おかげまいり」にみられたような、開放された雰囲気はその極端なものであったし、都市に遊樂的な場所が増大したのもそのあらわれであった。

名所化した奈良といっても、元禄のころまではなお寺社と年中行事が大きな比重を占め、奈良晒を主とする産業の町の性格が強く、したがって奈良への旅は、参詣や巡拝であり、行事の見物であり、産業のための来訪にとともに副次的な名所めぐりであった。ところが元禄のころ以後には、奈良への旅では信仰面が後退して、遊樂的な気分が濃厚になるという傾向があったことを見逃すことはできない。それは近世における宗教の指導性の衰退という現象や、社会の固定化による圧迫感という日本全体の条件にもよることはいうまでもない。要するに奈良は、寺社と年中行事と産業と自然とが一体となって人々を招き、歴史と伝統を思わせつつ、名所としての実態を整えてきたとともに、さらに遊樂の地としての性格も加えてきたのであって、他の大都市と同様に芝居や遊里の繁盛がみられたのである。

南都八景

中世末期には、ようやく奈良が旅人を迎える名所となってくるが、これに応じて世に知られてきたのは南都八景であった。すなわち、寛正六年（1465）に、春日社参詣の將軍足利義政に従った禅僧真葉は、その日記『おんりやうげんにちろく 蔭涼軒日録』に「南都有三八景、東大寺鐘、春日埜鹿、南円堂藤、猿沢池月、佐保河螢、雲居坂雨、轟橋旅人、三笠山雪」と記しているのがそれである。これはもちろん中国の瀟湘八景にちなんだものであるが、ここでは、明らかに自然と寺社が一体化し、旅人もまた登場する奈良の名所がみられる。

つぎに南都八景が中世末期にとりあげられ、近世を通じて人々に親しまれたしとして詩歌に詠みこまれたものを引用してみよう。まず、さきにも記した『奈良ふくろ角』にみえる俳諧である。

南田堂藤

しら藤や近九二一の朝ぼらけ

芦 鶴

佐保川蟹

ほたる火に若衆も見ハやさほの川

湛 水

猿沢池月

浅くとも浪の安積や月の母

顯 水

春日野鹿

秋の鹿芝生に角やおもひすり

鼓 山

三笠山雪

山餘力あり八百八禰宜やねの雪

言 水

雲井坂雨

傘張の涼ミところよ雲ゐ坂

随 志

東大寺鐘

鐘に香ハやえさくらかも方七里

芦 月

轟橋行人

とくろくか橋を跛足の思案鹿

龍 淵

つぎには、幕末であるが伴林光平の和歌がある。

春日野鹿

春日野は時雨ふるらし小男鹿のこは毛の星のかけそ疊れる

三笠山雪

大君のみかさの山のはつみゆきはやふりつみぬとしの御調に

佐保川螢

佐保川や井手こす水のおとなひもほのかに見えて螢とひかふ

雲井坂雨

秋さむき雨のなごりの雲井坂いまか落葉も降りはしむらん

轟橋行人

旅人もいまかむまやをいてつらん月に声あるとゝろきのはし

南円堂藤

円かなる法の日かけにときめきて南に靡く藤浪のはな

猿沢池月

猿さはの池の玉藻のかすことにひかりやわかかつ秋

の夜の月

東大寺鐘

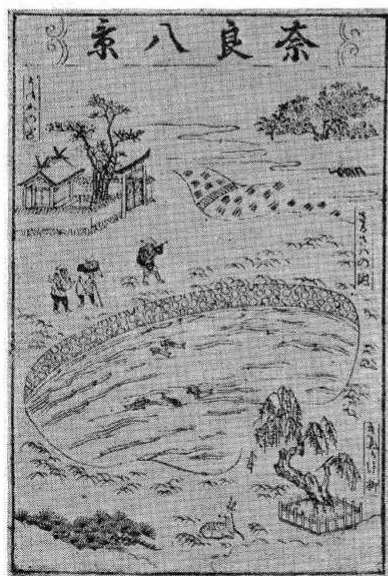
月かけも今か東の大寺にほのみえ初めて鐘ひよく

なり

その他、奈良八景とはいわないが、奈良を名所とみるものの一例として、寛永九年（一六三二）の斎藤徳元の『独吟千句』のなかの「名所之俳諧」をあげることができる。

武蔵野やもゆる若草ちどみわて

武蔵



奈良八景『奈良名所記』

春日の里にそむる紺布

大和

もがり竹奈良の都にゆひまはし

大和

しのぶのみだれ用心のせり

陸奥

この句のなかに紺布がみえるように、近世初頭の名所奈良のよび物は寺社と自然とだけではなく産業が加わり、やがて佐保川に布をさらす景観も奈良名所の姿となってくるのである。

名所の数々

奈良名所としては奈良八景が知られてはいたが、名所めぐりの中心はやはり春日社と東大寺と興福寺とであった。しかし、南都の町のなかには、なおほかに名所や旧跡として、人々が訪れ、また旅人に感懐をもよおせるところはあった。元禄のころに書かれたと思われる「奈良の時雨」には、春日・興福・東大の三社寺を除いた町のなかの名所をめぐりながら、その由緒を詳しく記している。

『奈良曝』には町中の名所として、それらの個所とその伝承を記しているので、これをつぎに簡略にして列举し、近世に名所としていたところをみることにする。

頭 塔 清水町、藤原広嗣の怨霊が玄防の首を捨てた所という伝説の地

眉目塚 まめ山町崇徳寺内、玄防の眉と目を落としたと伝える所にできた塚

肘 塚 この町の会所の中、これも玄防のかいなをすてた所という

吉備塚 紀寺町の南の森の中、御霊社の神である吉備大臣を葬った所という

覚明が石塔 池の町北側東角、木曾太夫坊覚明のはてた所と伝える

百万石塔 鳴川町徳融寺内、もと高林寺内にあり、謡曲百万の塔

観音堂井 西新在家町慈眼寺前の井戸、弘法大師が掘った名水とされ、酒に使う

黄鳥が谷 慈眼寺観音堂前の川で、うぐいすが谷という

大井本 北市町南側東角、弘法四十八井の一

大井 芝辻町、弘法井の一、漢国・氷室祭のとき神人がめぐる
深井 下御門町東側、弘法井の一

かすり井 橋本町南側、弘法井の一で水は少ないが決して枯れない

たる井 たる井町南側、弘法井の一で水したたる井の意

従弟井 押上町中程、弘法井の一で、この名をとっていとくい橋の名がある

手分森 下三条町南側

率川 子守伝香寺前の川、開化天皇皇居の跡

松浦谷 大乘院の所、昔まつら長者が住んだあとという

鬼隠山 大乘院の後山、元興寺の道場法師にくみつかれて鬼がかくれたという

浅香山 菩提谷成身院の後山、きおん山の続きの山で古歌あり

山井 荒池へ下る道の西傍、興福寺の大事の書をうつすとき用いる水

魚養塚 十輪院の中、弘法大師の手の師匠魚養法師の塚

猿沢池 天竺彌猴池を表す、南都八景の内

衣掛柳 猿沢池の東、うね女が身を投げたとき衣をかけたと伝える

菩提川 猿沢池東の川、菩提僧正がこの辺に住んだという

菩提谷 菩提川の東、この辺興福寺僧の居所

五十二段 猿沢池の東、右に左府の森、東に馬谷道あり

楊貴妃桜 五十二段の上左手、興福寺僧玄宗の愛した桜を唐の故事に託す

猿塚 うねめの宮の前、今はくずして石をふせる

雲井坂 押上町の南一里塚の辺、この所の夜雨は八景の一、昔この東大寺の門に金光明四天王護国寺の額があり、夜々龍がこれをねぶつたが、その時此辺に雲うずまきによってこの名がある

轟橋 雲井坂の南の橋、車三輛ならぶ故にこの名ありという、八景の内
みどりが池 雲井坂の南、これより四町離れている大鳥居がうつるとい

菖蒲池 菖蒲池町、頼政の後室あやめの前の住所と伝う、池あり

尼が池 中筋町の西側、昔は大池で、平忠盛の後室尼御前の住所

佐保川 この川の螢は八景の内

佐保山 今の眉間寺山

千坊坂 今在家町石橋より北の坂、昔寺あり坊数が千あったという

北山 十八軒、昔頼人が住んだという、この頼人のもとに恵心僧都の描いた阿弥陀仏があった

藏俊石塔 興善院町の坂の上りたて、興福寺の名僧藏俊の石塔で、おこりをわずらう人に驗あり

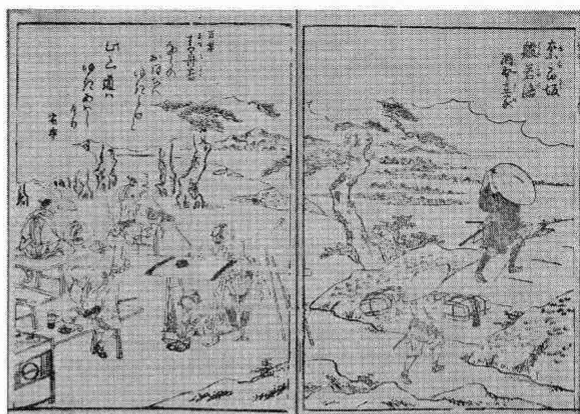
多門山 松永久秀の城址

笠卒都婆 興善院町より北、弘法大師または実範上人の作と伝える

豊成卿石塔 鳴川の大念仏の寺の内、なお豊成とその娘中将姫の肖像がある

奈良町中の名所のほかに、郊外にも寺社にもうで詩藻をやしない遊子を楽しませるところがあった。奈良を中心とする奈良文化圏内には、事実名所旧蹟や寺社が多く、これらも広い意味での奈良の名所と考えてよいであろう。まず、東北方には中ノ川から忍辱山円成寺・淨瑠璃寺・岩船寺などの諸寺があり、さらに笠置の史跡や近世後期に文人墨客によって喧伝された月ヶ瀬梅林の名勝がある。北方には一休で名高い薪の酬恩庵があつて、さらに宇治につづく。西に向かえばいわゆる佐保路の興福院・不退寺・海竜王寺・法華寺から、西大寺・秋篠寺・喜光寺などがあり、平城宮跡や菅原の旧跡も招呼の間にある。唐招提寺・薬師寺のいわゆる西の京はもちろんのこと、法隆寺辺や竜田も奈良めぐりのなかに入れてよいであろう。また南方から東方にかけては、帯解寺から高樋の弘仁寺や菩提山正暦寺、あるいは山村の円照寺や白毫寺などがある。これらはいずれも名刹として知られていた。

岡村正辰の『大和巡礼集』と『続大和巡礼集』は、さきにも述べたように俳諧を名所別に集めたものであるが、この書にあげられている名所のうち、現奈良市域内のものを参考としてあげると、つぎのとおりである。



奈良坂の旅人『大和名所図会』

鹿野園 般若寺 二月堂 忍辱山 丹生 西之京 菩提山 法花寺 飛火
(富雄川)
 富緒河 東大寺 若草山 春日 辰市 高天 手向山 高円 奈良 鸛滝
 野守 不退寺 興福寺 秋篠 赤膚山 佐保 猿沢池 西大寺 雪消沢
 三笠山 招提寺 白毫寺 菅原 菅原伏見里 (いろは順になっている)

俳人に喜ばれたところがどのようなところであつたかがこれから察することができる。

また紅葉の名所については竜田が知られるが、洞の紅葉はらについて『南都年中行事』につぎの記事がある。

季秋紅葉所々に有と雖、洞の紅葉を言て奈良の名産とす。然し往昔より手向山の紅葉は世に其名高けれども、中世以来は絶えて所在をうしなひし也、又洞の紅葉と稱せし物、寛文年比までは八幡山の南若岬山の北谷間に在りしとかや、近年は三笠山本宮嶽の北面水屋川の水上邊楓樹多くして、暮秋の紅葉錦繡を引はえたる如くにして景色たゞならぬゆへ、遊山逍遙の輩多し

そのほか幕末になれば、皇陵も巡拝の場所として注目されてくるのである。

近世において、奈良の名所をたずね年中行事に感慨をもよおした人は多い。ここではその中でも著名な人々について、その紀行文などをたどって記しておこう。

奈良と文人の旅
 まずその先驅をなすものとしては、連歌師宗祇の高弟宗長の『宗長日記』がある。宗長は郷里駿河と京都の間を

何度か往復したが、大永二年（五三）駿河から伊勢を経て奈良に入った。その連歌の旅の一節はつぎのようである。

白土法眼澄英の坊に一宿、又明る日南都千手院、澄英同道、連歌あり、発句

冬やいつわか草やまのはる日かな

一日ありて慈尊院、十日あまり宿坊、連歌発句

今朝ちるやあらしの花のゆきの庭

蓮花院にして

まじれちれあらしの雪のはなもみぢ

大仏にまいり、それより山城薪へまかりのぼる、門送かれこれさきにたちて、般若寺坂にまたる

まさに奈良見物の連歌の旅であつた。なお宗長は南都から所望されてつぎの句をものした。

そめかくるさはかぜいくか春のいろ

うぐひすのいにとよらるゝ柳かな

いづくよりわか草山の春日哉

つぎに三条西公條きんぐだがある。公條は連歌師紹巴とともに歌の修行として高野・吉野への途次、奈良名所を訪ね饅頭屋宗二を案内としたようである。その紀行文『吉野詣記』によると、天文二十二年（五五）二月下旬奈良坂越えて奈良に入り、般若寺の文殊堂に立ちより旅宿に入ったとあるから、転害辺の宿であつたろうか。翌日春日社にもうで、ついで地藏菩薩の縁日に十輪院に参つて「石にきりつけられたる仏菩薩歴々として殊勝の靈地なり」といつている。つづいて興福寺の諸堂に結縁し、東大寺に行つて大仏殿をはじめ八幡宮に参り、念仏堂の舍利を頂戴し二月堂に参詣した。そのあと「雨すこしふりて笠など取寄て知足院など見てやどりに帰」つた。その翌日は、眉間寺・不退寺・法華寺・海竜王寺・超勝寺（昇）・西大寺・招提寺・薬師寺・大安寺・元興寺などに結縁し、そのつぎの日に在

原寺をさして南都を出ている。この間紹巴と連歌を詠み交わしているが、この行は寺社巡拝と連歌の修行につぎるといってよい。

関ヶ原の戦のあと、世の動揺もおさまってくると、京都貴族の春日もうでも復活した。慶長六年（二〇二）六月には、後陽成天皇の女御（近衛前子）が多数の公家衆をつれて春日社に参詣した（三藝院記）。また大徳寺の沢庵は、漢国神社の芳林庵に寓居の間大和の名所旧跡めぐりをしたが、その巡拝の寺には菩提山・忍辱山や法華寺・西大寺・唐招提寺・眉間寺などがあった。ついで浄土宗の僧袋中良定も南都の各社寺を広く巡拝している。つぎに前関白近衛信尋は、寛永十六年（一六三九）九月に連歌師里村玄的らと奈良に来了。かれは一乗院の坊官中沼左京亮元知宅に泊まり、春日社・興福寺・東大寺などをめぐり、能楽や槍術を見ている。信尋はその翌年二月にも新能見物のためにふたたび南都に遊び、寛永二十一年（一六四四）には吉野・初瀬への下向の途に奈良を過ぎて、つぎの発句をものしている。

藤浪や又立かへり三笠山（『本源自性院記』）

詩歌をたしなむ文人は、奈良の名所や行事を句想を養う好個のところとしたようであるが、何といっても著名なのは元禄期の芭蕉であらう。

芭蕉は貞享元年（一六八四）に江戸の草庵を立て帰郷を兼ねた関西旅行に出かけたが、このときの紀行が『野晒紀行』であった。その翌年奈良を訪ね二月堂にお籠りした感動を「水取や」の一句として、その印象を聴覚に凝集したのであった。貞享五年ふたたび近畿の地をたずねたが、唐招提寺の鑑真和上像を拝して詠んだ

若葉して御目のしづく拭はばや

は、この旅の所産であった。そののち芭蕉は奥の細道の大旅行の疲れを郷里上野に休める間、元禄二年（一六九二）にまた奈良を訪れ、春日若宮祭礼を拝観したが、そのときは大仏殿再興工事の最中であつたので、

初雪やいつ大仏の柱立

初雪や聖小僧の笈のいろ

の二句を残している。そののちもかれは奈良に遊んだが、元禄七年（一六九〇）猿沢池畔に一泊して

ひいと啼くしり声かなし夜の鹿

と吟じ、大坂へ赴く道すがら

菊の香や奈良には古き仏達

きくの香や奈良は幾代の男ぶり

と詠んでいる〔杉風苑書翰〕。また『泊船集』には

菊の香にくらがり登る節句かな

の句もある。貞享元年の作である有名な

奈良七重七堂伽藍八重桜

の句は、何処での作であるかは伝えていないが、芭蕉に奈良についてのこのような多くの名句を残させたのは何であつたであらうか。故郷上野に近いといつても、奈良には彼を誘う俳友の住家はなかった。とすればやはり芭蕉と大和とのつながりは、西行法師の足跡としての魅力もさることながら、ことに奈良の年中行事となつていたお水取りなどであり、また古い仏達のいます名所旧跡ではなかったであらうか。

貝原益軒は元禄五年（一六九八）六三歳のとき、京都から吉野への往復に奈良見物をし、同九年に『和州巡覧記』を刊行した。それによると、歌姫越えで奈良に入り、神功皇后陵などの陵墓・超昇寺跡・秋篠寺・西大寺をみて菅原・伏見・蓬萊村を経、西の京に招提寺・薬師寺を拝して南方柏木杜・辰市・大安寺をまわった。ついで奈良の北部

である法華寺・海竜王寺・不退寺・眉間寺・佐保川・雲井坂・轟の橋を見めぐり、さらに興福寺・元興寺・率川・春日野・野守・雪消の沢をめて、春日大明神・春日山・若宮八幡・手向山・若草山・三月堂・二月堂・東大寺・飛火野を見物して一たん郡山へ出た。帰途には石上神宮を経て菩提山に寄り、般若寺・奈良坂を通過して帰京している。このなかで雲井坂・轟の橋の項には「南都八景の一なり」、若草山・飛火野には「名所なり」と注記している。また太宰春台は「寧楽懷古」と題してつぎの詩を賦している。

南都茫々古帝城 三條九陌自縱橫

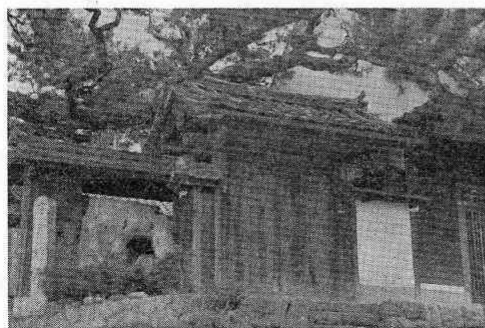
藉田麥秀農人渡 馳道蓬生賈客行

細柳低垂常惹恨 開花歷亂竟無情

千年陳迹唯蘭若 日暮啾々野鹿鳴

古都を思う情緒にみちた詩である。

江戸の俳諧師高橋養笠庵利一は、明和二年（一七六五）五二歳のとき大和に旅して『大和めぐり』を書き残している。そのなかで春日野について「一の鳥居より本社へ十八町と云り、此間の風景は、草にあそふ鹿樹にやとる猿、左右は松柏まれにしてあせほの木のみ多し」と記し、二の鳥居から内の灯籠の多いのに感心し、それから東大寺の諸堂をめぐり、興福寺については「いにし年の回祿に七堂伽藍の結構すへて烏有となり」と述べている。また本居宣長は明和九年（一七七七）耳梨から三輪に向かう道で「思いやる空は霞の八重ざくら ならのみやこも今や咲らん」と思いを馳せたことを『菅笠日記』に記している。そのほ



旧 追 分 本 陣（富雄中町）

か奈良を訪れた人々の筆の跡は多い。

旅の道筋と

旅籠屋・土産物

これら旅の人たちの道筋についてつぎに簡単に記しておこう。北の方宇治・京都に通じる街道には奈良坂越と歌姫越があったが、この時代には奈良坂道が主であったようである。『奈良曝』によると、すべて奈良坂口からとして木津へ一里半、賀茂へ二里、伊賀上野へ九里、宇治へ六里などと記している。

西の方大坂へは八里で、下三条口から尼辻を経るのであるが、暗峠越と河内中垣へ出る中垣越と清滝越があり、西南に向かつては、やはり下三条口から出る道で十三峠越えと信貴越と亀瀬越とがあって、河内の高安・国府や摂津の堺・住吉に出ることになっていた。南には長谷街道になる上街道と、京終口から出て横田を経て南方吉野方面に連なる中街道と、郡山へ通じる下街道があり、北方からの歌姫越は尼辻に出て郡山に通じていた。東には笠置を通る伊勢街道と柳生につづく柳生街道があった。これらの諸街道は、京都・郡山・柳生・紀州などとの連絡の道であり、大坂・堺・大和平野・山中・南山城などとの経済交流の道でもあったが、参詣巡拝の道として盛んに利用されたものである。

そのうちとくに伊勢まいりの道についていえば、『奈良曝』も最初にこれをあげてつぎのように記している。

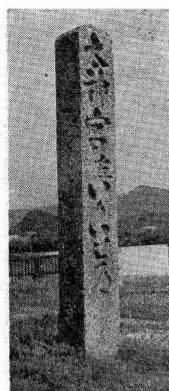
一 奈良の長谷海道にかゝりて伊勢へ行にハ、ならかいなづか口をいへ長井、柴や、くらの庄、いちのもと、いその上、

田部、^(河)江原城、丹波市、柳本^(後略)

一 ならぬ伊賀海道をへて伊せへ行にハ、賀茂^{ならぬ}一里、かさぎへ二里大

川原迄一里半、嶋がはら一里半、上野へ二里^(後略)

とあって、長谷街道と伊賀街道の二街道が主であったことが知られる。奈良坂には「いが・いせ」を示した道標があり、緑ヶ丘浄水場



道 標
(緑ヶ丘浄水場)

前には、つぎの刻銘のある高さ三段、安永二年（二七三）の大道標が現存している。

（西面） 太神宮 左 いがいせ道

（北面） いせ迄 凡二十七里

（南面） 安永二癸巳 三月吉日

なお、奈良町から上街道へ出る櫛口と称する中辻・肘塚・櫛木・竹花の各町のうち、中辻町の交差点にはかつてつぎのような道標があったという。

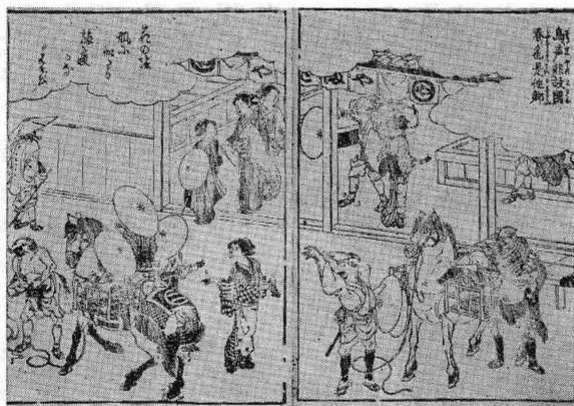
（北面） 右 かうやよしの道
すぐ はせ越伊勢みち
左 なばり越伊勢みち

（南面） すぐ 春日 大仏

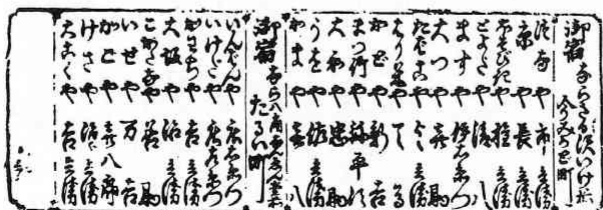
（東面） 右 春日 大仏 二月堂
文政三年辰四月

（西面） 右 はせ越いせみち
すぐ なばり越いせみち
左 春日 大仏 二月堂

伊勢参宮の道は、右にのべたほかに、鉢伏峠から田原・一台峠・上柚ノ川・馬場・



旅 籠 風 景『大和名所図会』



宿 引 札（天理図書館蔵）



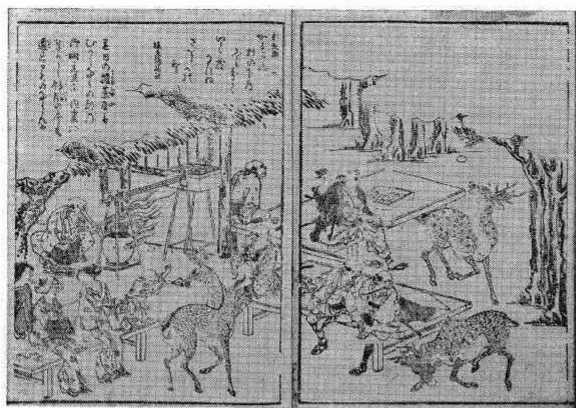
宿 引 札 (天理図書館蔵)

針ヶ別所・小倉・小原と大和高原を西北から東南へ斜断して笠間峠を越え、急坂を下り名張に出て主街道に合する名張越伊勢道や、石切峠を越え、忍辱山・大柳生を経て上野方面へ達する道、鉢伏峠を越え田原から水間峠・大橋を経て月ヶ瀬に向かう街道などがあった。つまり東山中や肘塚町は伊勢参宮の沿線にあたっていたので、さきあげたようにおかげ灯籠の建立となったのであろう。

奈良にくる旅行者が増加するにつれて、旅宿も整ってきた。奈良の旅籠屋については、室町時代中期に東大寺関係者が東大寺郷中の手貝・今小路・押上辺でこれを経営したのが始まりであるという。このころから転害郷が旅宿郷とも呼ばれるように発達した。また猿沢池に近い今御門・樽井あたりも奈良の旅宿町であった。これらについてはすでに職業の項で述べたから、ここでは遊覧客との関係について記すこととする。まず伊勢講などはそれぞれ定宿をもち、宿には講の看板をかがけていた。また旅籠屋では客引き札を出して遊覧客をさそっているが、そのなかの一例として、樽井町の宿引き札の一部を引いておこう。

なら入口をさる沢のいけまで八丁あり、此間に御たづねの宿(名所)のなまいをかたり、みちをまよせ候宿引おおく候あいだ、とちうのことは御とりあへなく、おぼしめしの御くに元おおんたづねの宿へ御入来被成下候

このような状態で旅宿の数もふえ客引きもさかんになると、宿屋の待遇にも問題が生じ、風紀の乱れもあったから、ここに安心してとまれる宿が求められ、やがて旅館業組合ともいうべきものができた。文化元年(二二四)に大坂玉造の弓弦屋の手代源助が始めた浪花講がそれで、奈良の代表的な



春日担茶屋『大和名所図会』

旅館もこういう組織に入っていたようである。しかし他面では、與六という旅人の案内者があり、「油墨やさらし屋旅籠屋へ旅人を同道し来れば、うはまへの銭を取事とかや、與六札など云る事あるのよし」〔やまと記事享保二十一年の俳書 施題の部〕とのうわさもあった。なお幕末になって旅宿仲間の間に客争いがおこっている。

奈良が名所としても詣でよりはむしろ遊覧の町となってくるにつれて、土産物の需要も増してくる。これに応じて奈良産業が衰退への過程で土産物化したものも多い。奈良土産の記録の古いものに『日葡辞書』にあられ酒がみえるが、さらに寛永十五年（一三八）に著された俳書『毛吹草』に諸国の名物が収載されている（第二章）。

さて土産物は一般に店で売られたであろうが、「さらしニても油煙墨にても御もとめ候はんニハ、宿のていしゅ御頼ミ有て御かい候へハやすし」（「奈良」）という様子でもあったらしい。名所記や案内図の挿絵などをみると、諸白酒屋・饅頭屋・餅だんご売屋などの土産物屋があり、茶屋・鹿せんべい売り・若草山登り籠屋など、遊覧客相手の商売も盛んであったことがわかる。

植桜楓之碑

さてこのような奈良の名所は、いかに守られてきたであろうか。奈良では、元禄の東大寺復興の盛時のち間もなく興福寺が炎上して大半の堂舎を失った。ここに名所奈良の大半を占める興福寺境内には荒廃が目立ってきたのである。奈良の経済力の衰退を物語っている。さらに安政六年（一八五）には奈良の見

ものの一つであった元興寺の五重塔も焼け落ちた。このような悲運のなかで奈良を名所として復興しようとした人として、奈良奉行川路聖謨^{としまささ}を忘れることはできない。それは現在の奈良公園の緑化のもとをつくり出した人であったからである。

聖謨が奉行として在任したところから約一〇〇年前の宝暦年間にこの境内地に植樹が行なわれたが、嘉永のころには多くは枯れて風致も損われていたらしい。聖謨はもともと緑の保護には熱心で、就任早々に春日山の官林にみずからの寄付を含めて五〇万本の苗木を植えさせたこともあり、荒れた興福寺・東大寺の両境内に植樹を計画した。嘉永二年秋、まず率先して両寺に桜と楓を奉納し、寺社や町民にも協力を呼びかけた。これにこたえて一乗院・大乗院の両門跡をはじめ多くの町民が協力し、わずか二か月で数千株の桜や楓が両境内に植えられ、さらに高円・佐保地域にまで植樹したという。このとき聖謨が詠んだ歌が残っている。

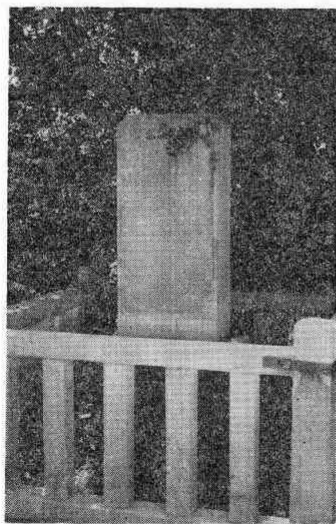
植わたす数も千もの花もみぢ

これや大和の錦なるらむ

花もみぢここにうつして諸人と

俱にたのしむこころうれしき

また翌嘉永三年三月、この事業完成の次第を書き記念の碑を建てた。いま五十二段わきにある「植桜楓之碑」がそれであって、碑にはつぎの文章が刻まれており、台石にはつぎのようにこれに協力した当時の奈良町の著名な人たちの名が刻されている。



植桜楓之碑

植櫻楓之碑

寧樂之爲都、自古少火災、是以閱千餘年之久、而巋然猶存者、不遑枚舉、豈大蘇國天孫始闢之地故有神或佑護之歟、且土沃民饒、風俗淳古、每至良辰美景、則都人挈槁遊于與福東大二大利、數筵設席、邀嬉歡娛洵擊壤之餘風、太平之樂事也、當是時、遠遊探勝者、亦自千里而至、故二利多嘉奇花、而寶曆中有植櫻千株者、寢就枯槁、今則僅存耳、今季都人相議、欲復舊觀、乃植櫻楓數千株、於二利中、以及于高圓佐保之境、一乘大乘兩門跡、嘉之賜以櫻楓數株、於是靡然仰風、而欣之者相繼、遂蔚然成林矣、花時玉雪之艷、霜後酣紅之美、皆足以娛遊人而怡心目也、衆人喜甚、將建碑勒其事、請記於余余謬承、寵命、尹此地既五季矣、幸由僚屬之恪勤、薰俗之醇厚、而職事多暇、優游臥治累歲無滯獄囹圄時空、而國中竊盜亦減過半矣、由是、官賞賜屬吏、而都人亦得以樂其樂、況今有此舉、不唯都人得其樂、而四方來遊者亦相與享其樂、此余所欣擇而不能已也、然歲月之久、櫻也、楓也、不能無枯槁之憂、後人若能補之、則今日遊觀之樂、可以閱百世而不替、此又余之所望于後人也、故不辭而記之、以勒諸碑、一乘法王、爲題其額、余文謫陋、不足觀、然法王親翰、則足使櫻楓增光華矣

嘉永三年歲次庚戌三月 寧樂尹 從五位下左衛門尉源朝臣聖謨撰并書

台上段

(南面)

発起人

右衛門支權兵衛

思樓陶々

窓内

亭南北

亭有跡

益五郎

初軒正秀

重光

通称古川弥三郎

(この間六名分欠)

亭々亭姑膽

通称半田理兵衛

第四章 奈良の近世文化

[illegible]

通称 因津宗詮	多福庵安茂	通称 橋本謙藏	致思樓汝舟	同	植木屋佐兵衛
通称 金春八左衛門	多福庵安信	通称 星野喜市	好真齋一水	同	植木屋捨吉
通称 金春八郎	青雲舎井鏡	通称 笠松又助	隨雲亭如龍	同	河州中振
通称 林條左衛門	日新舎又也	通称 小山田主鈴	青雲館小山	同	植木屋榮助
通称 岩成権八郎	三徑舎塞馬	台石下段	追加	櫻楓山方	植木屋六左衛門
通称 山口兵治郎	竹林舎清庭	櫻楓請負人	南都靄福院町	撰州池田	南都東向北町
通称 鳥居藤四郎				石工嗽樂	

名所記類の刊行

初期の名所記

近世に入ると、奈良を訪問する人を対象とする案内記・道中絵図などの出版が、年を追って多くなり、旅行者のものとした紀行文も、また紹介されるようになった。その内容も一方では寺社旧跡の由来に考証をほどこしたものから、体系づけられた本格的な地誌の類まで刊行され、当時の利用者に便宜を与えらるるとともに、後日の歴史的史料としても推賞に値するものが刊行されている。

江戸時代初期にまずあらわれたのは、万治二年（二六六）刊行の『南北二京霊地集』二巻である。著者は袋中良定で、稿本はそれより早く寛永元年（二五三）に完成していたらしい。山城・大和両国の神社仏閣三三社寺の由緒を説き、なお、高野山・熊野にもおよんでいる。記述にあたっては引用文献・参考文献を掲げ、著者の私見は明確に傍註とするなど、良心的な態度で一貫している。

つぎに寛文六年（二六六）に筆写された『和州寺社記』上・下二冊がある。その著者は未だつまびらかではないが、内容は奈良市内を主として全大和をふくめて五九寺社を収め、寺社の朱印石高・縁起・霊驗・沿革・祭祀・堂塔の結構をはじめ、付近の名所旧跡・方位里程までも、詳細かつ平易に叙述したものである。前者よりははるかにとり上げられた件数も多く、大和一円的主要寺社はほとんどこれに網羅されている。

他方いわゆる名所記ではないが、俳諧集のなかに名所をよみこんだものがあらわれてきた。その一つはさきに句を引用した斎藤徳元の『独吟千句』である。徳元は貞徳の門人で寛永九年（二三三）にこれを集めたが、奥書に「此俳諧は、伊豆国熱海在湯中に、つれづれに異なる興にもやと、百韻ごとの名をかへ品をかへて、此浦のもしほ草によそへてかきあつめ侍りぬ」とあって、名所之俳諧・草木之俳諧・茶湯之俳諧など一〇に分類したものである。名所がここに意識され、奈良もまたそのなかに詠みこまれていたのである。

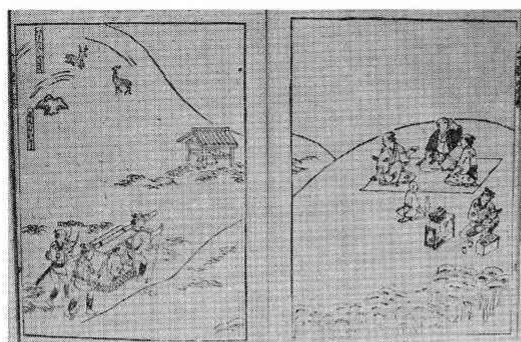
ついで郡山の俳人岡村正辰は、さきに述べたように俳諧集として寛文十年（二七〇）に『大和順礼集』を撰した。正辰については、現在まだ経歴など明らかではないが、この書は京都の荒川宗長の板にかかり、発句数は一〇九九で、作者四六一人の作を集めたものである。当時の俳書がいずれも四季分類にしたがったものであるのに対し、本書は大和に限り巻頭に大和全図をかかげ、しかもいろいろは順の名所別分類であるところに特色がある。その意味で名所記類の性格をもあわせもつものとして注目に値する。この書が好評を博したのであるうか、正辰は寛文十二年に『統

大和巡礼集』を出版した。

寛文・延宝のころになると、地誌・紀行類の刊行は全国的に激増してくる。たとえば、京都においては『京童』(万治元年刊)・『洛陽名所集』(万治三年刊)をはじめとして、『京雀』(寛文五年刊)と、『京童跡追』(寛文七年刊)、さらに『出来斎京土産』(延宝五年刊)・『横本京雀』(延宝六年刊)などが続々とあらわれた。このことは全国的な傾向であったが、大和にも直ちにこれが波及し、多くの関係書籍が出版されるようになった。その先駆的なものが、『南都名所集』と『奈良名所八重桜』の二名著である。

『南都名所集』は一〇巻。『延宝三年卯花月』(三巻)の村井道弘の序文によると、太田紋親がその大略を撰作し、さらに村井がこれを再撰して奈良名所の各項に古歌や自作の句を付記したものである。本書は南都といっても、とくに寺院の伝説がその大部分を占めており、神祠の歴史には古書を引用するところもあるが、全般に僧侶の立場からの説明が多く、本地垂迹説が至るところにみられる。また、七巻以後の四冊は南都を離れ、広く大和一円の神社を叙述したものである。本書の特色は挿絵が豊富で構図にはやや誇大された人物を配し、図柄も必ずしも正確ではないが、第一巻には墨屋・白金細工・諸白酒屋・饅頭屋・つかまき屋・刀屋・御菓子所・文殊四郎小刀・かみそりやが描かれ、第二巻には元禄再建以前の露坐の大仏・手向山八幡宮の焼跡の絵があり、以下興福寺の伽藍が全部整っているようす、元興寺五重塔・遊女町・頭塔森拝所・餅だんご売屋・遍照院門高塀造り家並などがあって、当時の奈良町内の様相を目の前にうかがわせるものが非常に多い。

前者に遅れること三年、延宝六年(一七六六)二月に『奈良名所八重桜』が刊行された。その序文によると、江戸の人久保秀興が奈良の知人本林伊祐をたよって来寧し、あいともに奈良の古跡を丹念に尋ね歩くという趣向をとっており、内容は奈良町内だけに限って詳細に書かれている。本書の装訂はいいえ、印刷も鮮明、とくに挿絵は



若草山遊覧『奈良名所八重桜』

当代一流の浮世絵師菱川師宣の筆といわれ、これまた当時の奈良町の様子を示す図版が少なくない。このなかには大仏殿元禄再建以前の露坐仏（第三巻）・若草山登り籠屋（第四巻）・春日祭礼行列（第六巻）・鳴川町傾城屋（第七巻）・大乘院旧姿と鹿せんべい売り（第八巻）・興福寺七堂伽藍・南大門前新能（第九巻）・窪弁才天（第十一巻）など、興味深いものがある。その他花の下にたたずみ群飲する図などが編中の諸所にみられ、『八重桜』という書名への思入れをうかがわせるものである。

師宣の挿絵といえども一つ著名なものに『大和名所鑑』がある。元禄九年（一六九二）正月発刊の三巻のもので、序文によると本邦の名所旧跡を書画であらわして、これに簡略な説明をつけ、居ながらにその地を見聞させるという趣向である。そのうちの多くの部分を占めるのが畿内の風物・名跡であって、奈良町寺社の挿絵も少なくないが『奈良名所八重桜』と同様の題材になるものが多い。

奈良見物に訪れる諸国の旅行者たちは、大阪・京都方面から、また伊勢・伊賀方面から、さらに西国巡礼は礼所順を追って紀州路から大和国中へ入りこみ、それぞれの方向へと去って行く。したがって奈良町に出入りする人々は、当然大和国中のかんりの地域を通過することとなるが、この傾向に應じて大和各地の寺社・名所地を記述した書物に『和州旧蹟函考』がある。本書の題簽には別名の『大和名所記』という名をにかけているが、他書とまぎらわしいので内題を用いるのが普通である。本書には延宝九年（一六八八）の序文があり、翌天和二年に刊行された一五巻二〇冊の本で、著者は林宗甫であ

る。宗甫はかの饅頭屋で文化人として知られた林宗二の子息であろうといわれているが明らかではなく、郡山の俳人として知られ、屋号を蠟燭屋と称した町人であった。内容は、大和国一五郡にわたり大小の旧跡寺社について記したもので、約二〇〇種におよぶ参考文献から援用考証し、みずからも遠近を踏査して郡山の草庵でこの書を成した。収載した項目は非常に多く、記述もまた詳細である。しかも諸書にあらわれながら所在の明らかでないものについて、とくに一括して「郡未勘」としておく慎重さをとっている。後世地誌研究家が広くこの書から引用するのも、このような本書に対する信頼度の高さによるためであろう。このうち現奈良市域に関するものは、第四巻まで、全量の約四分の一におよんでいる。製板・摺刷ともにすぐれ、さきの『奈良名所八重桜』に比肩できるほど真摯で美麗な著作であるが、これだけのものでありながら、古影を伝える挿絵を欠いているのは惜しまれる。

奈良町の 貞享四年（一六八七）、奈良町について簡潔ながら要領のよい小冊があらわれた。洛南嘯月堂から板地誌と図会 行された『奈良曝』で、この書物はこれに先だつ二年前に京都で刊行された『京羽二重』になら

ったものであることは、その書名や形態や編集様式のうえからも明らかである。さきの諸名所記は、もっぱら奈良町内外の寺社名所地を紹介することばかり意を注いで、一般町の事情や民生に関するものについては全く配慮するところがなかった。それに対して、小冊ではあるが五巻からなる本書の特色はこの方面に詳しく、それによってようやく奈良町坊間のようすを簡略ながら知ることができるようになった。本書では奈良市内を三地区に分け、町名の下に町役軒数を記し、町名の由来や沿革を記しているほか、それぞれの町の祠堂・特色のある職種などをあげている。江戸中期ごろの巷間の史料に乏しい奈良としては、まことに格好な地誌ということが出来る。

なおこのほかに、板行されたものではないが成立年代が元禄ごろと推定される『奈良地誌』がある。これは筆者も不明で、写本として現在中野友山文庫に所蔵されているもので、書名も仮に「奈良地誌」とされている横綴本で



『奈良坊目拙解』（天理図書館蔵）

ある。内容の三分の二は「奈良惣町中並興福寺領」と題された部分で、それが奈良の全町の詳しい説明となっており、各町につき家数・竈数や、主な寺社や町名の由来も書かれ、終わりには各合計、たとえば惣町数二〇五町とあり、総括して分類や変遷など詳細に整理されている。つぎに「大和国寺社御朱印」として寺社の石高や簡単な縁起を記している。当時の奈良町を知るうえに貴重な資料である。

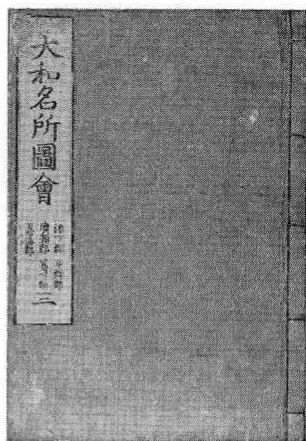
これより時代は少し降るが、奈良町坊間の事情を一層くわしく調査編集したのが、享保二十年（一七三五）にできた『奈良坊目拙解』である。本書の著者無名園古道については、後年の『大和人物志』（明治四十二年奈良県刊）が平松古道（倍千）と混同記述して以来、久しく誤りを重ねてきたが、最近の研究によって、前記『南都名所集』の著者村井道弘の子、村井勝九郎（古道・升哲）であることが明らかにされた。そしてこの書によって古道が医家としてよりも、当代きつての郷土研究家としての地位を占めていたことが明らかになったのである。本書は全一五巻からなり、著者は序文の中で、旧来の地誌が町民の居所である町々の事歴にほとんどふれるところのないのを遺憾とし、若年のころから諸書を読破して、関係の記事を収集し、古伝俗説をも聴問してその詳細を記したと述べている。しかもその記述態度は、知り難いものは不詳としてこれに私意を加えるこ

となく、自分の考えには「按」と記し、旧来の説の誤りと思われるものは証拠に照らして改め、全般に出典を明示するなど、これまでの諸書にその比をみないほど学問的な態度をもって終始している。奈良町は本書の出現によって本格的な純地誌をもつことになったといえる。そのち寛政年間になって『奈良坊目拙解』を簡略化したものが久世宵瑞（井意）によって『平城坊目考』三巻として成り、さらに金沢昇平によって明治二十三年（一九〇〇）に活版刊行された。なお金沢昇平はみずから『平城坊目遺考』を著し、これの補遺としている。

古道には本書とならんで参考となる『南都年中行事』の著がある。自序によると「我四十とせあまり見聞にしたかひ、俗談（へん）癡言を拾ひ書ととめ置」いたとあり、元文五年（一七〇〇）に成ったものである。前記『奈良坊目拙解』とは性格を異にするが、当時の奈良を知るうえで貴重なものである。

奈良については延宝・元禄のころから享保期にかけて多くの地誌が出たが、そのちにもなおこの種の著述が出版されている。享保十一年（一七三〇）刊行の『南都賦』二巻は、このなかでも特異な存在といえる。著者は小笠原基長で、版元の奎文堂瀬尾源兵衛は伊藤仁斎門下の詩文家として知られ、多くの著作を出している。本書の上巻には大和の神祠を、下巻には寺院を収め、さらに当地の民俗の美しさや信仰心の深さ、あるいは山河の奇勝や桜梅の美・猿鶴の鳴声、さらに風月雨雪の景色から生産物資までも記している。内容はすべて漢文体で自註を加え、考証引用文献の数も一六〇の多くをかぞえるが、純地誌とよぶには多少文学的な修飾が多いといえる。

享保十一年（一七三〇）には漢文の純地誌『大和志』一六巻がみられる。関祖衡・並河誠所らの共編となっているが、祖衡の没後、誠所が主としてことにあたったものである。並河誠所は京都の儒者で伊藤仁斎の門人であり、和歌・文武の諸技にも通じた学者である。はじめに『河内志』を出して以来、幕府の後援により日本全土の国ごとの地誌を編集する意向であったが、結局は畿内五か国六一巻で終わっている。編集の方式はほぼ中国の『大明一統志』に



『大和名所図會』

ならい、総覧の部に建置沿革・府治・疆域・形勝・風俗・祥風・租税の項をおき、以下各部の項には郷名・村里・山川・関梁・土産・藩封・神廟・陵墓・仏刹・古蹟・民俗・文苑について記している。文章は平明な漢文で、名辭は多く説明も豊富で、人物や物産にくわしいこともすぐれた特色といふことができる。

『大和名所図會』は寛政三年（一七九一）に上梓され、総合的大和地誌として完成したものである。著者秋里籬島は京都の人、さきに浪花の画家竹原春朝斎とともに『都名所図會』を著して絶賛をうけ、書林のすすめによって引続いて本書を成したのである。全大和一五郡を六卷七冊に収め、序言・凡例・跋文を備え、さらに各巻頭に目次をおくなど形式はととのい、国内寺社名所・名産物・伝説・風俗・習慣・年中行事を見出しをつけて編成している。解説はおおむね平易で、詳細にわたっていきいきと描写され、出典も明らかにされている。本書の特色である挿絵は全巻の約四〇割ですべて竹原春朝斎が描いている。寺社境内や名所地の景観を写すのがおもであるが、ほかに生業や生活・遊樂に関する絵画をまじえていて、引用傍証の資料の多いこと絵画の正確緻密な点は、のちの研究家にも信頼されている。

案内記・ 奈良・大和の地誌は時代がくだるにつれていよいよ精緻なものとなり、家庭に置いて利用された**地図の刊行**り、ときには諸侯・貴紳の土産ものにもされたという。しかしこれでは旅の携行用としては不便で、簡単な案内記出版の必要が生じたためであろうか、ここに小型で単冊のものが出るようになった。

大和のこの種の名所案内記は、延宝六年（一六八八）刊行の『大和国独案内』にはじまるようである。その筆者は不



『南都名所道筋記』版木（筒井正夫氏蔵）

明であるが、巻の初めに「いざややまとをみやこ人に、めいしゅゆらいをかたらむと」とあるように、出発点を京都にとつて、綴喜郡・相楽郡を経て奈良に入るから、京都の人の作かとおもわれる。順路は奈良町の中は簡単にすこし、西山から南下し、中和地方をへて山の辺を北上するコースをとる。▲印をつけた各寺社や史跡の項目にたいしては一〜三行の簡単な説明を付しているが、そのうちとくに法隆寺と当麻寺がくわしい。これに類するものとしては、享保十年（一七三〇）刊行の『大和廻り記』、さらに約三〇年後の『大和廻り手引案内』などがあるが、各多少繁簡の差はあっても本質的な差異はない。

つぎに刊記はないが元禄五年（一六九四）出版と思われる『大和名所記』がある。型は半紙大の薄冊で、これに記された行程は南都から始まり、大和を五つの地域に分けて案内する形になっている。すなわち、最初に奈良町・札場・東大寺・興福寺・春日四社の町の部があり、つぎに「南都東山北より南山迄」「奈良より西山北より南迄」「奈良より南平地」「奈良より西北より南迄平地」の四道筋にわけ、あとに七大寺や大和の給人居城や五畿内各地への道法みちのりなどをあげている。小項目主義で地方支配の事情や里程表などをつける新しい編集ぶりといえる。この系統に属すると思われるものに宝永・正徳ごろの作かとみられる小型の『大和名所独旅』がある。ついで明和六年（一七六九）に上梓された『大和名所記』があり、これは前記同名のものに奈良町内の部分が大増補されたものである。さらに同系のものに『大和廻り名所記』があるが、刊行年次はわからない。

つぎに奈良町だけを扱ったものとしては、ややさかのぼる貞享元年（一六八〇）の『南都名所道筋記』が非常にすぐれたもので、通常の見学コースや脇道コースも集約し、懇切



『南都名所記』(筒井正夫氏蔵)

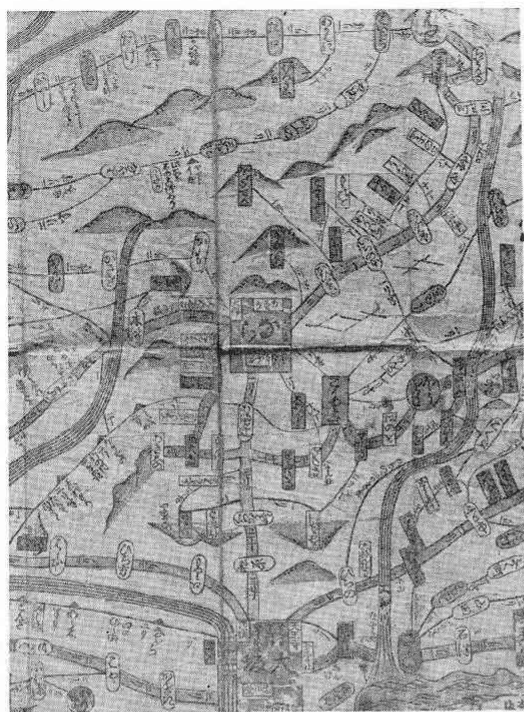
で統一のとれた案内記となっている。元禄十五年(一七〇二)刊行の『南都名所記』は、さきの元禄五年刊『大和名所記』の編集方法をそのまま南都だけにあてはめたもので、装訂などにも共通点が多い。ただ大仏殿再建を契機として民衆の奈良見物が高まりをみせたころのものとしては、大仏に関して触れていない点に疑問が残るが、略装急造のようですが版面からもうかがわれて興味のあるものである。本書は宝暦四年(一七五四)およびそれ以後にも増版して出され、さらに『改正南都名所記』というものも、安永三年(一七九三)・文化二年(一八〇五)・文政元年(一八二〇)・天保十二年(一八四一)・嘉永五年(一八五三)・万延二年(一八六一)と六回にわたり出されている。絵図は猿沢池周辺・興福寺南大門前新能・若宮御祭礼・春日本社と若宮社頭・二月堂法華堂と釣鐘・大仏殿などの六種を収め、終わりに「ならめいぶつ」として具足・晒・油煙墨・酒・刀脇差・饅頭・菊一文字鐙刀・団扇・文殊四郎小刀・西大寺豊心丹などの紹介をして、末尾には「南都大仏絵図屋庄八版」とある。絵図屋庄八は元禄十五年以降幕末まで代々地誌類を出版・販売していた店舗である。

宝永五年(一七二八)に発刊された『御手の糸』(下)は山口素枝の作で、町内の案内に終始し、解説は大体に簡略であるが、これまであまり顧慮されなかった野守大明神その他数か所に筆がおよんでいる。全体にいささか文飾が多く、祭文・雛子の風韻があつて案内者が口誦する体をなしているが、これは奈良遊覧が一つの社会習俗として定着してきた影響とも受けとれるものである。巻末の「奈良町名物」には、前記のものに加えて奈良草子・飯鮓・奈良茶・しる飴

・法華寺つち犬などがみえる。中和地方の田居曳という人の手になる『大和古跡道の枝折』は天明元年（二六）刊行の小冊で、奈良を中心として、国内一円の名所をあげているが、道筋を線書きにし、○●□▲△印などを寺社・名所・宿駅・村里の印とし、具体的に順路・方向・位置・距離などを示して実用になつてゐる。解説は一般に軽く、旧来の案内書ではほとんど扱われていなかった町村や小古跡にもふれてゐるのは確かに一特色をなすもので、巡礼遊覧の案内書はここに至つて現代風なものの萌芽をみる事ができる。奥書に大坂八尾新町・京都六角通に各一軒、大坂心斎橋に二軒の書店をあげてゐるのは、本書の需要が広範囲のものと思込んでのことであらう。

地誌・案内記とあわせて述べなければならないものに地図がある。江戸時代の奈良絵図のうちでもっとも古いものは寛文六年（二六）版行の『和州南都之図』であつて、「南都尾崎三右衛門開板」と記されてゐる。これにつぐ宝永六年（七六）二月上梓のものは「南都山村重三郎開板」と刷られてゐる。両図とも山のある東を上とし、町屋は黒、町名は道路上に記入し、興福寺・東大寺などの子院は仮名符号や数字を図中に印して、図のわきに書かれた子院名と対照できるようになつてゐる。版面の大部分は鳥観図式であるが、主要建築物や山などには写景図式が採用されてゐる。しかしこの両図を比較してみると、寛文図には大仏が露坐となつてゐるのに反し、宝永図では大仏殿が描かれ、東大・興福両寺の子院数にも多少異動があり、寛文図のふくろ町の「五味藤九郎殿」と記した代官所が、宝永図には「御代官ヤシキ」と記入替えされてゐるなどのちがひがある。要するに宝永図は寛文図を襲用して小改訂を加えたものとおもわれる。宝永図の発行者については、さきの山村重三郎のほか「南都山村左門開板」「南都山村和泉開板」とあるものの二種があるが、これは同年三月におこなわれた大仏殿の落慶を機会に大々的に販売されたことを物語るものであらう。

宝永図におくれること約七〇年、安永七年（三六）に大坂版の『和州南都絵図』がでてゐる。その表現法は前者と



『大和巡りひとり案内図』

ほとんど変化がないが、享保二年焼亡の興福寺堂塔が旧姿のまま描かれているなどの杜撰なところがある。しかし一方では図面右上に奈良八景ならびに陵墓、左上には名所名木および土産物や各地への里程などが掲げられている。紙幅も前者の約半分で携帯に便利なもので、奈良遊覧の人たちに相当多く利用されたものであろう。

そのうち天保十五年(弘化元年 一八四四年)と元治元年(一八六〇年)に出された横長図系統のものがある。これは寛文・宝永の縦長図よりもひとまわり大きく東を上にしたもので、近郊名所地をバノラマ風に周辺へめぐらし、里程・方向を示すほか、奈良八景・七大寺そのほか有名寺社・祭礼についての短い解説をつけている。市内の記入も正確でくわしくしかも鮮明となり、よく携帯されたものであろう。発行所は前にもふれた「奈良大仏前絵図屋庄八」である。

このほか簡易な一枚刷りで、著名な奈良名所だけを示したものがある。その一つ『南都名所之繪図』と称するものは元禄五年(一六九八)の木版で、いかにも古雅な風姿に東大寺・春日社・興福寺の界隈が収められ、これには市街地は全く含まれていない。通路は黄、少数の殿宇は退紅色で筆塗りし、余白には簡略に半記号化された芝林の点綴がある。この彩色法は書誌学にいう

たんろうほん

丹緑本の系統に近いものである。本図で注目されるのは、中央上部の大仏殿に大仏の坐像が描かれていて、そのうえに柱と屋根覆いだけの仮堂の描写があることである。そして左上部には「大仏尊像 一、高五丈三尺五寸、一、おもて……」と眉・口・耳・螺髪などの寸尺が示され、「一、しゃうむてんわうのこんりゆう、てんぴやうしやう（開眼供養）ほう四年四月九日大ふつかいけんくやう、元禄五年迄九百四十二年ニ成也、興福寺、一、和銅三年内大臣淡海公造立、七堂がらん四丁四方、元禄五年迄九百八十三年ニ成也、寺領二万千百十一石五斗余」と刻されている。これらの記事からすれば、大仏殿造立工事中の奈良見物者に対して販布されたものと察しられる。いま一つのは『おちめいゑよ多づ』と題したもので、図の配置は前図と大差はないが、鹿・樹林・灯籠・小祠・人物をも描くなど、全般に図柄が賑やかとなっており、大仏殿は復興した姿で前面の大唐破風（おからばふ）からは大仏の顔が拝される図柄である。左下枠外に「から大佛ゑづ屋庄八はん」とあり、おそらく大仏殿完成後の宝永・正徳ごろの版であろう。最後のものは右図を少し簡略にしているが、この前の版と大きく変わるところは、興福寺の南大門などが焼失したのでこの図では示されておらず、そのうち復旧した金堂が描かれているので、この版は金堂や南円堂復興以後のものと思われる。

長期にわたる江戸時代を通じては、このほかなお多くの案内地図などが刊行されたであろう。たとえば寛政八年（一七九六）版の『大和巡りひとり案内図』は京都菊屋喜兵衛板で、一面が単純化された奈良中心の地図で京都・大坂・伊勢・和歌山までを含み、他面に各名所を列挙したものである。いまそのすべてをここにいいつくすことはできないが、ただ大仏前の絵図屋庄八こと筒井氏の刊行物がもっとも多数に販売流布されたことは、注目に値することであろう。奈良に關したこれらの地誌・案内記や各種の地図は、奈良への旅行者の往来につれて各地にもたらされ、奈良をたずねる人々の旅情をそったものであろう。